

## 随想

## 随想ファッションと没個性

## 時代とともに失われつつある《若者の自信》

(株) P P Q C 研究所 加藤 宏光

過日海外出張の途中、成田空港へ向かう途中の列車で、何となく乗客を眺めていた。そこへ、アーミッシュ風のファッションを装った若者が現れた。

黒い幅広のハットを被り、いかにもペンシルベニア州で見かけたアーミッシュ(注)そのままの男子である。彼の目はいかにも優しく、とがったファッションが与えるイメージより、本物のアーミッシュを思わせる。しかし、アーミッシュでないことは、腕に入れ墨(タトゥー)というべきか?)を入れ、耳にイヤーホーンを差し込んで、スマホを扱っていることでわかる。この奇抜なファッションに気づいて、それから乗車してくる人達の服装に注目してみた。

彼ほどではないものの、降りする若者の中には相当思い切ったファッションの人は少なくない。著者ほどの年代になると、ファッションもオーソドックスになりやすいため、奇抜なファッションには違和感を受けてしまう(もともと、著者はファッションセンスには疎く、もっぱら家内の勧めるものをただ着るだけであるから、ファッションそのものについて御託を述べることは控えるべきであろうが…)。

最近読んでいる書物に《日本人というリスク》というものがある。橘玲(たちばな・あきら)という人の著書である(講談社+α文庫二〇一三年三月発行)。その内容は、別に稿を改めたく

なるような内容であるから、ここでは詳しく触れない。しかし、その一節に一九八六年と二〇一二年のJALへの新入社員の写真が取り上げられていた(一四七ページ、就職氷河期、個性は封印、と題したコラム)。一葉は全員がリクルートスーツと呼ばれるダークスーツに身を固め、もう一葉はいかにもさまざままなファッションで自己主張している様が写されている。

最初にそれらを見たときには、リクルートスーツの写真が一九八六年のもので、个性的なファッションの写真が二〇一二年のものだと思った。しかし、写真に付記されたコメントでは逆である。

二〇一二年の入社式に際し

て、会社が服装を定めたわけではないのだそうである。新入社員が自発的に選んだ服装がそろいもそろって、ダークになるのである。最近の入社式では、皆がみなダークスーツになるのだという。

この現象は、バブル経済が崩壊し右肩上がりの経済が期待できなくなつて以来顕著になつたもので、会社において没個性が有利になつたことに起因している。右肩上がりの経済システム下では一度の失敗が致命的にはならないが、ゼロサム化してしまつた経済の中では一度の失敗で社会からスパアウトされてしまう可能性が大である。そうした環境では目立たないことが生き残りの条件として重要にな

り、ファッションの没個性にも繋がってくる。一九八六年当時の若者は自分自身に自信をもっていた。それは経済社会が右肩上がりに伸びて行くことを自然に肌で感じたことに裏付けられていたであろう。そういえば、著者世代が社会人として出発した一九六五年頃には、日本の経済は輸出を主体として大いに進展していた頃であり、一部の製薬会社では畜産用動物薬部門が伸張のリーダー役を果たしてさえいた。こうした時代に社会へ船出する世代は

《俺にだって、何かができる》

という漫然とした自負・自信があった。その流れが維持されてきたのが一九八六年までの高度成長時代であった。

プラスチック時代からゼロサム時代へ移行したバブル崩壊以降、企業は人件費の削減を継続の一手段としてきた（以前取り上げたように小泉純一郎元首相の時代に竹中平蔵氏をもってアメリカ型経営を見習ったことで、この傾向は強まった）。し

かし、右肩上がりからゼロサム時代へ移行した以上、人件費への評価が厳しくなることはやむを得ない側面を有する。もつとも、著者は、アメリカ型経済への移行が避けられないとしても、その到来が遅ければ遅いほど救われるものを、自ら弱肉強食の経済機構を招き入れることは必ずしも望ましくなかったとは思ってはいるのだが！

プラスチック時代には、目立つことが経済社会で伸びる機会を得やすく、そうした環境では失敗を取り返す機会も与えられていた。しかし、ゼロサム社会となれば、減点評価がベースとなりやすく、目立つことは失敗をも目立たせ、失敗はスピニアウトに直結しやすい。社会人として、いまスタートする新卒者が、時代の趨勢を肌で感じて没個性によつて生き残りを図るのは、一種の保護色かもしれない。

一方で、自分を主張したいという欲求はいまも昔も変わらないう。花の慶次という漫画でよく知られるようになった前田慶次

郎に代表される婆娑羅（バサラ）も戦国という拡張時代を終えて安定期に入ったときに自己を表現する方法にこれしか残っていないなかった奇抜な衣装と行動で自己主張をしたことによるものであるう（バサラには室町末期に始まる佐々木道誉などのバサラ大名の例もあるので、一概にはいい切れないが…）。

はじめに触れたアーミッシュ様のファッションも没個性を迫られる大人の社会に対して、必死に自己表現をする若い世代のあがきのようなものかもしれない。

オランダまでの飛行機の中で《ピリギヤル》という映画を見た。昨年評判になった、偏差値三〇の女子高校生が慶應大学入試に成功したという自伝に基づいた小説を映画化したものである。ストーリーはそれなりに面白かったが、主人公の女子高生がピリギヤルであったときには《金髪にへそ出しファッション》であったものが、偏差値が六〇、模擬試験で慶應大学合格の可能

性五〇％に達したときには、髪を切り、茶髪をやめ、普通の女子高生制服に変わっていた。この映画の監督の演出で修飾されているとは思いますが《自分に自信が持てないときには奇抜なファッションで自分を表現し、自信が生まれてからは普通の女子高生に変貌している》という設定は、世相をよく反映しているものと感心する。

隣にいた妻と

『若さの故に、人に迷惑を掛けないという条件付きで相当の変わったことまでは許されるネ!!』と語り合いながら、こうした単純な自己表現でしか自分を主張できない現在の社会風潮を残念とも、情けないとも思いながらアーミッシュボーイを見送った。

注・アーミッシュ…ペンシルバニア州などに見られるドイツ系移民。アメリカへ移民した当時の性格風俗を維持するため、現代の技術を生活に取り入れれない。電気器具を使用しない（もちろん検視通信機器は生活内にない）。農耕・牧畜などで自給自足の生活をする。